

日本語母語話者と韓国人日本語学習者による 終助詞「よ」の使用実態*

－ 談話完成テストの調査結果に基づいて－

一色舞子**
misshiki@cju.ac.kr

<目次>

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 4.3 一方的・反抗的な場面 |
| 2. 問題の所在 | 5. 談話完成テストによる「よ」の使用実態調査 |
| 3. 先行研究 | 5.1 情報の提示・是正の場面の「よ」の場合 |
| 4. 「よ」が使用され得る場面の分類 | 5.2 承諾・是認の場面の「よ」の場合 |
| 4.1 情報の提示・是正の場面 | 5.3 一方的・反抗的な場面の「よ」の場合 |
| 4.2 承諾・是認の場面 | 6. おわりに |

主題語: 日本語教育(Japanese language education)、日本語母語話者(Japanese native speaker)、韓国人日本語学習者(Korean learner of Japanese)、終助詞「よ」(final particle “yo”)、使用実態(actual status of use)、談話完成テスト(discourse completion test)

1. はじめに

本稿では、日本語教育の場での終助詞「よ」の効果的な提示方法の構築を目指し、前半において「よ」が使用され得る主な場面を抽出して分類した後、後半において日本語母語話者と韓国人日本語学習者を対象とした談話完成テストの調査結果に基づいて両者の「よ」の使用実態を明らかにし、日本語教育の場で「よ」を提示する上で意識化すべき要点について検討する。

構成は次の通りである。2で問題の所在について述べ、次の3で先行研究を概観する。4で「よ」が使用され得る主な場面について確認した後、5で日本語母語話者と韓国人日本語学習

* 本研究は韓国日本近代学会第37回国際学術大会(2018年5月12日、於韓南大学校)において口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

** 清州大学校 人文学部 助教授

者を対象にした談話完成テストの調査の概要と調査結果を紹介し、両者による「よ」の使用実態を明らかにする。最後の6で日本語教育の場で「よ」を提示する際の要点について検討し、本稿のまとめを行う。

2. 問題の所在

「よ」のような終助詞というのは、あってもなくても発話の意味が一見変わらないように思われる(例えば、(1)のような場合)。しかし、場合によっては「よ」の有無が不自然さ(2)や不適格(3)、聞き手への配慮の欠如(4)(5)といったコミュニケーション上の問題に繋がることがある。

例えば、「よ」は(1)のように相手の誤りを是正する目的で事実や自分の判断等を表明するときや、(2)のように相手に何らかの情報を知らせるときに使用されやすい。(1)のような場面での「よ」は任意であるが、(2)のように相手が話し手に注意を向けていない状況では「よ」があった方が幾分か自然である。勿論「よ」がなくても「是正すること」や「知らせること」は可能であるが、どこか独語的である。特に(2)のような発話状況の場合、当該の発話が独語的だと、その発話が相手に向けられたものなのかどうか不明瞭である。

一方、(3)のように相手からの依頼を承諾する場合、「いいですよ」の「よ」は必須的である。「よ」のない「いいですφ」だと承諾したことにはならない。ただ、厄介なのは次の(4)のような場合である。同じ承諾の場面でも(4)の場合は「わかりましたφ / 承知しましたφ」で充分伝えることができ、「わかりましたよ / 承知しましたよ」のように「よ」を加えると、特に相手が目上である場合は反抗的な印象を与える。さらに言えば、(5)のように、ときに「よ」は人間関係の秩序を脅かすような印象を与える可能性をも含む。

- (1) A 「そういえば、田中さんって、福岡出身でしたよね？」
 B 「いえ、田中さん、{北海道ですよ / 北海道ですφ}。」(作例)²⁾
- (2) (自分に背を向けて前を歩いている人のポケットから財布が落ちたのを見つけて言う)
 A 「あの、財布{落としましたよ / ?落としましたφ}。」³⁾

1) φは終助詞が付いていないことを示す。

2) 以下、断りのない限り、用例は筆者による作例である。

3) ?は不自然さが残ることを示す。記号については滝浦真人(2008)の凡例を参考にした。

- B (振り向いて落ちた財布を拾いながら言う)「え！あ、すみません。ありがとうございます。」
- (3) (上司Aが部下Bに書類のコピーを依頼し、部下Bがそれを承諾する)
- A 「悪いんだけど、この書類、コピーしといてくれない？」
- B 「{いいですよ / #いいですφ}。」⁴⁾

- (4) (上司Aが部下Bに書類のコピーを依頼し、部下Bがそれを承諾する)
- A 「悪いんだけど、この書類、コピーしといてくれない？」
- B 「{%わかりましたよ / わかりましたφ / %承知しましたよ / 承知しましたφ}。」⁵⁾

- (5) (講談師の神田松之丞が11歳の子どものからのファンレターについて語る)
- 神田「なんかねー、その一、ちょっとね、なんか、こー、上から(目線)の子どもだったんですよ。僕の熱烈な11歳の追っかけがいるんですけど、-中略(ファンレターの)最後の文末が、あの一、普通だったら『応援してます』じゃないですか。僕35歳なんで。(その子供は)11歳。(僕の方が)目上じゃないですか、『応援してますよ』って書いてあったんですよ。これ、本当に地味なんですけど、僕がめんどくさい人間なんで、『よ』ってひっかかるんですよね。」

2018年6月22日放送のフジテレビ「ダウンタウンなう」より
下線ならびに()内の補足は筆者による

母語話者の場合、(3)のように「よ」が必須的である場面での「よ」の不使用は起こらないと予想されるが、学習者の場合は、日本語力の差は勿論、その学習者がどのような母語を持ち、またどのような中間言語体系を形成しているかによって異なってくるだろう。特に韓国語を母語とする学習者の場合、韓国語に「よ」に対応する形式がないため、正の転移を産出の手がかりとすることができない。さらに、韓国語には「-요(-yo)」という音声的に類似した丁寧形の用言語尾があるため、「よ」の過剰使用等の負の転移があるかもしれない。

また、母語にかかわらず、学習者がどのような中間言語体系を形成しているかによっても「よ」の使用状況は異なってくるだろう。もし、学習者が「いいですよ」のように「よ」がないと承諾の意味にならないと認識していれば問題はないが、(4)のように「よ」が相手への配慮の欠如に繋がることのあるという認識がある場合、(3)のような場面でも「よ」の使用を回避する可能性がある。一方で、「よ」が相手への配慮の欠如に繋がることのあるという認識のない学習者は、(4)のような場面でも「よ」を使用する可能性があるだろう。

終助詞というのは、自然な会話運びを実現する重要な役割を果たし、ときに相手への親

4) #は当該の文脈では使用が不適切であることを示す。
5) %は特定の話者や場面に使用が限定されることを示す。

しみを表す手段となる一方で、一步間違えば相手との関係性を左右するほどの影響力を持つ。上記の(5)のように母語話者であっても対人配慮上の問題を招きかねない終助詞は、学習者にとっても習得しておきたい項目の一つであると言っていいだろう。

よって、本稿では日本語教育の場での終助詞「よ」の効果的な提示方法の構築を目指すべく、「よ」の主な使用場面の分類と導入の際に意識化すべき要点の考察を試みる。まず、これまで蓄積されてきた「よ」の意味機能に関する先行研究による知見と実際の用例を参考にし、「よ」が使われ得る主な場面を分類する。この分類は実際に観察される言語事実と矛盾しないことを考慮しつつ、学習者が習得の手がかりとしやすいよう、可能な限り複雑にならないような分類を試みる。前述の通り、「よ」は聞き手への親しみの表明になると同時に、その使用・不使用による不自然さや誤用、対人配慮上の問題の要因にもなる。以上のような点を意識した「よ」の解説は、日本語教育の場において不可欠であると考えている。

3. 先行研究

「よ」や「ね」のような日本語の終助詞の分類基準についての研究は、修正を積み重ねながら盛んに行われてきた。代表的な研究は、話し手と聞き手の判断の一致 / 対立を基準としたもの(益岡隆志1991)や、話し手と聞き手の認識の一致 / 不一致を基準としたもの(陳常好1987)、情報のなわばりの帰属を基準としたもの(神尾昭雄1990)、談話管理理論に基づき分析したもの(金水敏・田窪行則1998)であるが、これらの研究による分析では説明しきれない用例が観察されることも指摘されてきた。例えば、加藤重広(2001, 2004)は、「ね」と「よ」を発話に関する話者の態度のマーカ―と見て、情報が話し手と聞き手のどちらの管理下にあるものとして話し手が提示するかに基づき、実際に観察される言語事実と矛盾しない一般化を試みている。

加藤重広(2004)による仮説⁶⁾

「よ」は、話者が排他的に管理する準備があることを示す命題につくマーカ―である。

「ね」は、話者が排他的に管理する準備がないことを示す命題につくマーカ―である。

6) 加藤重広(2004) p.244, l.11-14

加藤重広(2004)によると、「排他的に管理する」というのは「独占的に管理する」のと同じで、自分がその命題や情報の最優先で最上位の管理者であることを示しており、ある情報を提示したとき、その情報について真偽や根拠などを含めて管理する意向が自分にあると述べることであるという。そして、そのように述べることは、発言に責任が伴うことでもあるという。さらに、加藤重広(2001)では、独占的に知識管理を行い、情報や知識へのアクセスに序列をつけてしまうことは、それだけの責任をとるだけでなく、待遇の観点からも決して好ましいことではない。場合によってはポライトネスの観点から見ればFTAになることもありうるだろうと述べている。

それに対して、滝浦真人(2008)は「よ」「ね」の他、「か」を加えた三者を小さな体系と見て、それらの意味機能と語用論的機能の関係を説明している。そして、これら三者の意味機能を弁別的な素性の形で表現することを試みている。

滝浦真人(2008)による「か / よ / ね」の意味素性の仮説⁷⁾

「か」の意味素性は[−話し手]である。

「よ」の意味素性は[+話し手]である。

「ね」の意味素性は[+聞き手]である。

滝浦真人(2008)によると、「+」は当該の情報が話し手または聞き手の管理下に{現にある / あるべきだ / あると見なす / etc.}という話し手の構えであり、「−」は当該の情報が話し手または聞き手の管理下に{現にない / あるべきでない / ないと見なす / etc.}という話し手の構えであるという。そして、「か」の素性である[−話し手]の意味は“話し手の判断保留・判断放棄”、“よ”の素性である[+話し手]の意味は“話し手の一方的言明”、“ね”の素性である[+聞き手]の意味は“聞き手への共有の確認・促し”であるとする。

日本語記述文法研究会編(2003)は、「よ」について具体的な用例とともにその意味用法を記述し、「よ」について「その文が表す内容を、聞き手が知っているべき情報として示すという伝達態度を表す」と述べている。また、「よ」の機能がもっとも端的に表れるのは、聞き手が気づいていない事態に対して注意を向けさせようとする文に付加される例であるとする⁸⁾。このような例では「よ」の存在は必須的であり、「よ」のない文は話し手が気づいたこ

7) 滝浦真人(2008) p.137, 1.16-19

8) 日本語記述文法研究会編(2003:242-243)は、「よ」が聞き手に対する説明を行う「のだ」と機能が重なるため、状況説明をする「のだ」とともに用いられることがよくあると指摘している。一方、「のだ」は

とを独話的に口にしたというだけで、聞き手に注意を促そうという機能が感じられないという(例えば、(6)のような場合)。また、「よ」は当然知っているべきことを知らない聞き手に対する非難や皮肉を表す文に付加されてこのニュアンスを強めることもあれば(7)のような場合)、相手からの依頼を受け入れることを表す「いいです」には必須的に用いられるとする((8)のような場合)。

(6) あ、切符が落ちました{よ / ?φ}。 日本語記述文法研究会編(2003) p.242, 1.17より引用⁹⁾

(7) A 「君、株のことなんかわかるの？」

B 「わかるわよ」

日本語記述文法研究会編(2003) p.244, 1.1-2より引用

(8) A 「無理を言っているのはわかってるんだけど、手伝ってもらいたいんだ」

B 「いい{よ / *φ}」

日本語記述文法研究会編(2003) p.244, 1.11-12より引用

一方、日本語学習者の終助詞の使用に関する研究も盛んに行われてきた。従来の研究では、誤用分析のほか、近年では日本語母語話者と非母語話者の会話データを扱った分析により、接触場面における学習者の終助詞の使用実態が明らかにされつつある(高民定(2008)、高民定・崔英才(2015)、崔英才(2016)他)。

本稿では、基本的に加藤重広(2001, 2004)、滝浦真人(2008)による「よ」の仮説を援用し、日本語記述文法研究会編(2003)の「よ」の意味と用法についての記述を参照することとする。前半では、それらの仮説や記述を参照しながら実際の用例にも当たり、学習者が実際に「よ」を使用する上で手がかりとなるような提示方法の構築を目指すべく、「よ」が使用され得る主な場面を抽出し、その分類を試みる。後半では、前半で試みた「よ」が使用され得る主な場面の分類に基づく談話完成テストを実施することにより、「よ」が使用される可能性の高い場面という限定的な場面での母語話者と学習者の「よ」の使用実態を調査し、自然会話データからのみでは明らかにできなかった、母語話者による「よ」の使用傾向と学習者による「よ」の使用傾向ならびに使用上の問題点について検討する。

話し手が確かな知識をもたない事態に対しても用いられることがあるが、そのような例では、「よ」を用いないと、話し手がその事態を事実として知っているものとして表してしまうと指摘している。尚、「のだ」と「よ」の共起について、本稿では以上のような指摘があると言及するに留める。

9) 用例番号は筆者による。以下の(7)と(8)も同様である。

4. 「よ」が使用され得る場面の分類

これまでの研究成果を日本語教育の場へ落とし込むためには、それらを踏まえつつ、終助詞使用の実践に繋がるような手がかりを学習者に提示する必要がある。例えば、どのような場面で「よ」が使われ得るのか、その場面で「よ」は必須なのか任意なのかは勿論、使用あるいは使用しない場合の誤用可能性やインポライトネス(失礼)、FTA(フェイス侵害行為)のリスクはどの程度あるかまで説明の範囲に含めるべきだろう。しかも、学習者が可能な限りシンプルな手がかりで産出可能となるよう整理した上で提示する必要がある。

よって、本稿では、まず先行研究による説明や実際の用例の分析に基づき、上記のような点を考慮しつつ、「よ」が使用され得る主な場面を抽出し、分類した。以下、順に説明する。

4.1 情報の提示・是正の場面の「よ」

「よ」は話し手が聞き手に何らかの情報を殊更に知らせたいと思う場面で使用されやすい。話し手が聞き手に知らせたい情報なので、この情報は聞き手が知らないと言話し手が認識している情報である。この場面での「よ」は任意であり、「髪の毛に何か付いてるφ / 財布、落としましたφ」のように「よ」がなくても当該の情報を知らせることは可能である。さらに言えば、「よ」でなくとも「髪の毛に何か付いてるぞ」や「財布、落としましたか」のように他の終助詞を用いてもよい。

ただし、日本語記述文法研究会編(2003)でも指摘する通り「よ」がないと独語的となり、特に(10)のように聞き手が話し手に注意を向けていない発話状況では「よ」があった方が自然である。これは「よ」を含む終助詞自体の機能によると考えられる。つまり、終助詞は聞き手の存在を前提とするものなので、(10)のように当該の発話が聞き手に向けられたものであることを殊更に示すためには、終助詞があった方がよいということである。よって、「よ」でなくとも終助詞であれば、聞き手に向けられた発話であることを示すことができるので「ぞ」でも「か」でもよいのである。

では、なぜ話し手が聞き手に何かを殊更に知らせたいと思う場面で「よ」が使用されやすいのだろうか。それは、「よ」独自の機能によるものと考えられる。つまり、「よ」は命題内容の表す情報が話し手の排他的な管理下にあるものとして差し出す機能を持つため、話し

手は知っているが聞き手はそのことを知らないと話し手が認識している発話状況、すなわち話し手が当該の情報(「聞き手の髪の毛に何かついていてること」「聞き手の財布が落ちたこと」)を独占的かつ優先的に管理している状況下で用いられやすいということである。

この場面での「よ」は基本的にインポライトネスやFTAの要因になることはほぼないと言っている。むしろ「よ」のような終助詞は基本的に聞き手への親しみを示すことができるので、他者に受け入れられたい、よく思われたいという他者評価の欲求に配慮するストラテジーとしてのポジティブ・ポライトネスになると言える。特に(12)のように当該の情報を知らせることが聞き手にとって有益かつ緊急性が高い場合、聞き手との心理的距離が余程離れている場合を除き、このような場面での「よ」の使用が問題となる可能性は低い。

- (9) (向かい合って話している途中で友人に言う)

「あ、髪の毛に何か{付いてるよ / 付いてるφ}。」

- (10) (自分に背を向けて前を歩いている人のポケットから財布が落ちたのを見つけて、その人に言う)「あの、財布{落としましたよ / ?落としましたφ}。」(2)の一部を再掲)

- (11) (スマートホンを見ながら道路を歩いている友人に言う)

「田中くん、スマホ見ながら歩いてると{危ないよ / ?危ないφ}。」

- (12) (バスの出発時刻間際にターミナルの売店で土産物を買っている上司に言う)

「田中さん、急がないとバスに{乗り遅れますよ / ?乗り遅れますφ}。」

この場面での「よ」に近いものとして、以下の(13)から(16)のような情報の是正の場面の「よ」がある。この場合、聞き手の持つ情報の真偽が問題となっているが、聞き手が正しい情報を持っていないと話し手が認識している発話状況、つまり話し手が真の情報を独占的かつ優先的に管理している発話状況であるので、やはり「よ」が用いられやすいと考えられる。

- (13) A 「そういえば、田中さんって、福岡出身でしたよね?」

B 「いえ、田中さん、福岡じゃなくて{北海道ですよ / 北海道ですφ}。」(1)再掲)

- (14) A 「そういえば、田中って、福岡出身だったよね?」

B 「いや、田中、福岡じゃなくて{北海道だよ / ?北海道だφ}。」

- (15) A 「たしか、鈴木さんって、運転免許、持ってませんでしたよね?」

B 「いえ、{持ってますよ / 持ってますφ}。ちょうどこの間、取ったんですよ。」

- (16) A 「たしか、鈴木くんって、運転免許、持ってなかったよね?」

B 「いや、{持ってるよ / ?持ってるφ}。ペーパー・ドライバーだけだね。」

4.2 承諾・是認の場面の「よ」

「よ」は話し手が聞き手の依頼を承諾したり、聞き手自身や聞き手の持つ情報、聞き手の判断を積極的に是認するような場面でも使用される。承諾の場合、(17)(18)の「いい」や(19)(20)の「構わない」のようにそれのみでは承諾として成立しづらい述部のものに限られているが、このとき「よ」は必須的である。しかし、この場合すでに聞き手ありきの場面での発話なので、わざわざ終助詞によって聞き手の存在を前提とさせなくてもよいはずである。では、なぜこの場合に終助詞が必須的であり、「いいですね」「構いませんね」でも「いいですか」「構いませんか」でもなく「いいですよ」「構いませんよ」なのであろうか。これも「よ」独自の機能によると説明可能である。繰り返しになるが、「よ」は話し手が当該の情報を排他的に管理するという態度の表明である。承諾の場面における「(コピーをすることは)いい / 構わない」という命題内容の表す情報は、話し手が排他的、つまり独占的かつ優先的に管理しなければならないことである¹⁰⁾。さらに、話し手が独占的かつ優先的に管理するということは、話し手がそのことに対し責任を負うということでもある。特に「いい」や「構わない」のように、それのみでは承諾かどうか曖昧な述部の場合、「よ」によって承諾の意味を確立する必要がある。

ただし、「構わない」の場合はスピーチスタイルにより必須的か否か許容度が異なるようである。つまり、(19)「構わないφ」のように、友達など親しい相手に対する発話で、スピーチスタイルが常体の場合には「よ」がないと許容度が下がるのに対し、(20)「構いませんφ(構わないですφ)」のように、目上など心理的距離のある相手で、スピーチスタイルが敬体の場合は許容度が上がる。勿論、「いい(です)」と比べて「構いません(構わないです)」の方がそれだけで承諾として成立しやすいということもあるだろう。ただ、心理的距離のある相手で、スピーチスタイルが敬体の場合は、「よ」によって「(コピーすることは)構わない」という命題内容を独占的かつ優先的に判断するという態度を際立たせるよりも、聞き手へのインポライトネスやFTAを回避するために、「よ」を使用しないことが優先される場合もあると考えられる。

10) 加藤(2001)では、排他的知識管理をせざるを得ない状況のものとして次のような例を挙げ、「はさみを貸すことは構わない」という命題内容は、聞き手は到底アクセスできないことであり、所有者たる後続発話者が独占的に判断しなければならないことであると述べている。(加藤(2001) p.45, l.13-21)
例：「そのはさみ、貸してもらえますか?」「ああ、構いません{よ/*ね}」(加藤(2001) p.45, l.17 (52))

- (17) A 「ちょっと傘借りてもいい?」
 B 「{いいよ / #いいφ}。はい。」
- (18) (上司Aが部下Bに書類のコピーを依頼し、部下Bがそれを承諾する)
 A 「悪いんだけど、この書類、コピーしていてくれない?」
 B 「{いいですよ / #いいですよφ}。」(3)再掲
- (19) A 「土曜日の映画のことなんだけど、日曜日に変更してもいい?急にアルバイト入っちゃって。」
 B 「あ、うん。私は{構わないよ / ??構わないφ}。」¹¹⁾
- (20) (教員Aが学生Bに面談の日程変更を依頼し、学生Bがそれを承諾する)
 A 「明日の面談だけど、明後日に変更してもいい?急に会議が入っちゃって。」
 B 「あ、はい。私は{構いませんよ / 構いませんφ}。」

ただ、承諾の場面での「よ」は「わかりました」や「承知しました」のように述部ですでに承諾が充分成立している場合は必須的でなくなり、むしろインポライトネスやFTAの要因となり得る。つまり、(21)のように親しい間柄の相手で、スピーチスタイルが常体の場合はともかく、(22)のように目上であるなど心理的距離があり、スピーチスタイルが敬体の場合は、「よ」によって聞き手に馴れ馴れしい印象を与えるのみならず、目下である話し手が目上である聞き手に対して優位な立場から承諾するという、本来の人間関係の秩序と相容れない態度を表明することになる。この点については、次の4.3で後述する。

- (21) A 「鉢植えに水やっといてね。」
 B 「{わかったよ / わかったφ}。」
- (22) (上司Aが部下Bに書類のコピーを依頼し、部下Bがそれを承諾する)
 A 「悪いんだけど、この書類、コピーしていてくれない?」
 B 「{%わかりましたよ / わかりましたφ / %承知しましたよ / 承知しましたφ}。」
 ((4)再掲)

一方、承諾に近いものとして、「よ」は聞き手の潜在的な願望に積極的に応じようとする場面や、聞き手自身、聞き手の持つ情報や判断を積極的に是認する場面でも使用される。例えば、(23)や(24)のように「(話し手が聞き手の)代わりに店を予約しておく」あるいは「(話し手が忘年会の幹事を)やる」という、聞き手にとって望ましい(と話し手が一方的にはあるが認識している)申し出を積極的に行いたいときや、(25)や(26)のように聞き手の言動を積極的に是認したいときに「よ」が使用されやすい。これらの用例を見てわかるように、「よ」

11) ??は人によっては不適格と判断する程度の不自然さがあることを示す。

がなくても聞き手の願望に応じ、聞き手を是認することは可能であるが、「よ」がある方が話し手の積極性を示すことができる。先に言及した通り、話し手が独占的かつ優先的に当該の情報を管理するということは話し手がそのことに対する責任主体になるということである。つまり、「よ」を使用することによって、話し手が当該の情報の管理に対して責任を負うという表明となり、責任を負うということが情報の提示や判断に対する積極性を表明することになるのである。

尚、この場合も命題内容は聞き手にとって有益な情報なので、親しみの過度な表明によるインポライトネスの可能性は含むものの、「よ」はFTAの要因とはなりづらいと言える。基本的に、これらの場面での「よ」は、承諾の場面の「よ」を含め聞き手を積極的に是認する態度を示すものなので、ポジティブ・ポライトネスの表現となる。

- (23) A 「あ、明日行く店、まだ予約してなかった！」
 B 「それなら、俺が代わりに{予約しとくよ / 予約しとくφ}。」
- (24) A 「今年の忘年会の幹事、誰に頼もうかなあ…。」
 B 「私でよかったら、{やりますよ / やりますφ}。」
- (25) 「君の言っていることは{正しいよ / 正しいφ}。」¹²⁾
- (26) 「あなたのおっしゃるとおり{ですよ / ですφ}。私の理解不足でした。」¹³⁾

4.3 一方的・反抗的な場面の「よ」

これまでは中立的あるいはポジティブな場面での「よ」の使われ方を見てきた。しかし、「よ」は次のようにネガティブな場面でも用いられる。例えば、話し手が自分の意見を聞き手に強く押し付ける場面や、(27)のように話し手が聞き手に対して捨て台詞のように一方的に言い放つ場面で使用される。これらも「よ」独自の機能によるものと考えられる。「よ」は話し手が排他的に管理する情報を、聞き手との議論を期待せずに、つまりその情報の真偽や根拠等についての議論を見込まず一旦差し出すものなので、話し手が聞き手に一方的に押し付けたり、言い放つような印象を帯びるのである。

また、話し手が当該の情報を排他的に管理するということは、その情報を独占的かつ優先的に管理することなので、情報の管理に関して話し手と聞き手の間に序列を作ることにもなる。4.2のようにそれが当該の情報の管理に対する責任の表明になる場合もある

12) 加藤(2001) p.35, 1.10 (11)の例文に筆者が終助詞「よ」のない形を加筆したものである。

13) 加藤(2001) p.35, 1.9 (10)の例文に筆者が終助詞「よ」のない形を加筆したものである。

が、当該の情報の管理において話し手が聞き手よりも優位な立場であるという優位性の誇示にもなるため、FTAとなる可能性を含む。先の4.2でも触れた通り、心理的距離のある相手で、スピーチスタイルが敬体である承諾の場面で、「わかりました / 承知しました」のようにそれのみで承諾として充分成立している述部を用いて答える場合、「よ」の付加は聞き手に対して馴れ馴れしさ等のインポライトな印象を与えるのみならず、目下である話し手が目上である聞き手に対して優位な立場から承諾するという、本来の人間関係の秩序と相容れない態度を表明することになるが、これは以上のような「よ」の情報管理における話し手の優位性の誇示によるものと考えられる。

(27) 「はい、はい、わかりました。もう{いいですよ / いいですφ}。」¹⁴⁾

(28) (上司Aが部下Bに書類のコピーを依頼し、部下Bがそれを承諾する)

A 「悪いんだけど、この書類、コピーしといてくれない?」

B 「{%わかりましたよ / わかりましたφ / %承知しましたよ / 承知しましたφ}。」

((4)再掲)

「よ」は正当に判断・評価していない聞き手へ抗議する場面でも使用される。聞き手の発言等を不当であるとして抗議する際、話し手は自らの判断や評価の正当性を殊更にして主張する必要があるため、「よ」によって当該の情報(「現代アートのことがわかる」 / 「料理くらいできる」 / 「韓国の大学で講義を受講」できる)という、話し手が正当であると認識する情報を排他的に、つまり独占的かつ優先的に管理する構えであることを示し、当該の情報の管理における話し手側の優位性を示すということである。

(29) A 「おまえに、現代アートのことなんてわかるの?」

B 「{わかるよ / わかるφ}。」

(30) A 「君が料理するって!?本当にできるの!?何だか不器用そうだし…。」

B 「料理くらい{できるよ / できるφ}。」

(31) A 「韓国の大学に行って、ちゃんと受講できるのか?君にはまだ難しいんじゃないか?」

B 「韓国語の勉強も毎日してますし、{できますよ / できますφ}。」

先の一方向的に言い放つ場面も、以上のような抗議の場面も、話し手の発話の態度の問題なので、「よ」がなくても文法的不適格とはならないが、「よ」がないとそのような態度は表

14) 「滝浦(2008) p.142, 1.19 (14)の例文に筆者が終助詞「よ」のない形を加筆したものである」

明されない。例えば「よ」がない場合、ただ「(現代アートのことが)わかる / 料理くらいできる / (韓国の大学で講義を受講)できる」という命題内容の示す情報をありのまま述べているのみで、聞き手に対する抗議なのかどうか不明瞭である。「よ」によって、当該の情報を聞き手よりも優位な立場から差し出すという態度を示すことではじめて抗議となるのである。

以上のような場面で「よ」を使用することは、聞き手を軽くあしらったり、聞き手の判断や評価を否定することになるので、FTAの直接の要因となる可能性を含む。聞き手と心理的距離の近い間柄である場合、喧嘩腰でありながらも冗談めかした態度で発話する際に使用するのであれば、ポジティブ・ポライトネスとして戦略的に、つまり聞き手への親しみの表明として効果を発揮することもある一方で、聞き手との心理的距離が遠い場合は、馴れ馴れしさ等のインポライトネスのほか、相手の他者評価の欲求であるポジティブ・フェイスの侵害のリスクも高まる。

以上、本稿では「よ」が使用され得る主な場面を三つに分類し、上の通り提示した。日本語教育の場で応用する際は、学習者にとってよりわかりやすく簡略化する必要があるが、①「情報の提示・是正の場面」という聞き手に対して中立的な態度の場面と、②「承諾・是認の場面」という聞き手に対して肯定的な態度の場面、③「一方的・反抗的な場面」という聞き手に対して否定的な態度の場面に分類して提示するという方法を試みた。これは、学習者が終助詞「よ」を習得し産出するにあたって、対人配慮の観点からの説明も考慮に入れる必要があると考えるためである。次からは、上記の三つの主要な場面において日本語母語話者と韓国人日本語学習者が実際に「よ」を使用するのか否か談話完成テストを通して調査した結果を紹介し、両者の結果の異同に注目しながら、学習者が「よ」を習得し実際に使用する上での問題点と解説する際の要点を分析する。

5. 談話完成テストによる「よ」の使用実態調査

本稿では、日本語母語話者(以下、JNS)と韓国人日本語学習者(以下、KJL)を対象に、4で提示した「よ」の使用が予想され、発話状況や相手との人間関係、使用を指定した述語の異なる18の場面を設定して談話完成テストを実施し、両者の「よ」の使用実態を調査した。本テストは、以下の事項を基準に設定した場面での談話を完成させるものである。

- ① 「よ」が必須的あるいは任意に使用され得る場面とする
- ② 各場面における発話相手との人間関係は以下の三通りとする

- a. 相手とは親しい関係である(例：友達同士)
 - b. 相手が目上である(例：教員、上司)
 - c. 相手とは親しくない関係である(例：店員と客)
- ③ 各場面で指定された述語を使用することとする

本テストの対象者は、20代から30代までのJNS89名と、大学二年生と三年生対象の日本語関連講義を受講する、日本語学習歴6ヶ月から11年11ヶ月までの53名のKJL¹⁵⁾である。対象者には、まず発話状況の説明文を読んでその場면을イメージするよう指示した。そして、聞き手の発話を含むその発話状況で自分ならどのように発話するか、指定された語を必要に応じて形を変えながら使い、実際に話すように書いて談話を完成させるよう指示した。尚、本テストが日本語の終助詞「よ」の使用実態を調査するためのテストだとは事前に案内せず、KJLに対しては、テストの実施意図をより理解しやすくするため、発話状況の説明文と指定の語に韓国語訳を併記した。尚、指定された語を使用していない回答、文法的不適格等で発話の意味が汲み取れない回答、スピーチスタイルが設定場面と一致しない回答、当該場面における狙いと一致しない回答(例：承諾の場面で「いい」を使用し「いつまでしたらいいですか」のように回答したもの等)を無効回答とした。

以下、談話完成テストの例を一部紹介する。

談話完成テストの例(一部)

次の()内の文を読んで、状況をイメージしてください。それから、あなたならこの時どのように言うかを、「 」内の語を使って、実際に話すように書いてください。
「 」内の語は必要に応じて形を変えてください。

- ① (向かい合って話をしている途中、友達の髪の毛に何か付いているのを見つけて)
「付く」
あなた： _____
友達： え、本当?
- ② (向かい合って話をしている途中、先生の髪の毛に何か付いているのを見つけて)
「付く」

15) 中国人留学生1名を含むが、本人の申告により朝鮮語を母語とする朝鮮族出身者であることを確認済みである。

あなた： _____
 先生：え、本当?
 ③ (向かい合って接客を受けている途中、店員の髪の毛に何か付いているのを見つけて)
 「付く」
 あなた： _____
 店員：あ、すみません。ありがとうございます。

5.1 情報の提示・是正の場面の「よ」の場合

まずは、情報の提示・是正の場面の「よ」の使用実態であるが、今回は情報の提示の場面に限って調査した。談話完成テストの場面設定を簡潔に説明すると、場面1から3では、向かい合って話をしている途中、相手の髪の毛に何か付いているのを見つけたときに、「付く」を使ってどのように話すかを問うた。表の場面番号の横には、聞き手となる相手との人間関係を記しており、「親」は「親しい間柄」、「上」は「目上」、「疎」は「親しくない間柄」であることを意味する。相手の属性はそれぞれ友達、先生、店員とした。場面4から6では、自分に背を向けて前を歩いている相手のポケットから財布が落ちたのを見つけたときに、「落とす」あるいは「落ちる」を使ってどのように話すかを問うた。相手の属性はそれぞれ友達、先生、見知らぬ人とした。

<表1> JNSによる情報の提示の場面の「よ」

「よ」の有無	1親	2上	3疎	4親	5上	6疎
「よ」あり	79(88.8%)	70(79.5%)	80(94.1%)	72(80.9%)	83(94.3%)	77(88.5%)
「よ」なし	5(5.6%)	16(18.2%)	3(3.5%)	3(3.4%)	4(4.5%)	1(1.1%)
「よ」以外	5(5.6%)	2(2.3%)	2(2.4%)	14(15.7%)	1(1.1%)	9(10.3%)

回答例の一部を以下の通り提示する。回答例には場面記号と「よ」の有無、回答者記号を併記した。尚、回答例の下線とφ等の記号は筆者による。

(32) <1親・「よ」あり・JNS006> あ！髪の毛にゴミが付いてるよ。

(33) <2上・「よ」あり・JNS052> 先生、髪の毛に何か付いてますよ。

- (34) <2上・「よ」なし・JNS015> 話の途中で申し訳ないですが、髪の毛に何か付いていますφ。
 (35) <3疎・「よ」あり・JNS009> あのお、すみません、ゴミかなんか髪に付いてますよ。
 (36) <4親・「よ」あり・JNS060> あー！ちょっと(名前)！落ちたよ！サイフ！
 (37) <4親・「よ」以外・JNS040> おい！財布落としたぞ。かばんにしまったときな。
 (38) <5上・「よ」あり・JNS029> 先生、財布落としましたよ。
 (39) <6疎・「よ」あり・JNS065> すみません、財布落としましたよ。
 (40) <6疎・「よ」以外・JNS045> おさいふおとしませんでしたか。

<表2> KJLによる情報の提示の場面の「よ」

「よ」の有無	1親	2上	3疎	4親	5上	6疎
「よ」あり	28(52.8%)	8(15.1%)	12(23.5%)	31(60.8%)	9(17.0%)	9(17.0%)
「よ」なし	15(28.3%)	38(71.7%)	27(52.9%)	14(27.5%)	36(67.9%)	25(47.2%)
「よ」以外	10(18.9%)	7(13.2%)	12(23.5%)	6(11.8%)	8(15.1%)	19(35.8%)

回答例の一部を以下の通り提示する。

- (41) <1親・「よ」あり・KJL035> あ！髪の毛に何か付いてるよ。
 (42) <2上・「よ」あり・KJL022> 先生、先生のかみに何か付いてますよ。
 (43) <2上・「よ」なし・KJL003> 先生、すみませんが先生の髪の毛に何か付いてますφ…。
 (44) <3疎・「よ」あり・KJL005> あの、すみません。髪の毛に何か付いてますよ。(小声で)
 (45) <3疎・「よ」なし・KJL051> えっ、あの…。かみのけになんか付いていますφ。
 (46) <3疎・「よ」以外・KJL017> あの、すみません。かみのけに何か付いていますけど。
 (47) <4親・「よ」あり・KJL012> ○○ちゃん、さいふ！落としたよ！どうぞ。
 (48) <4親・「よ」なし・KJL004> おい、財布落としたφ！
 (49) <5上・「よ」あり・KJL018> あのう、先生、財布落としましたよ。
 (50) <5上・「よ」なし・KJL016> 先生、すみませんが、財布を落としましたφ。
 (51) <6疎・「よ」あり・KJL048> あの、さいふおとしましたよ。
 (52) <6疎・「よ」なし・KJL039> あの、すみません。ポケットからさいふがおちましたφ。
 (53) <6疎・「よ」以外・KJL047> すみません…さいふがおちましたが…。

JNSの場合、「よ」の使用が任意であるにもかかわらず、これら情報の提示の場面の「よ」の使用率が79.5%～94.3%と極めて高く、これらの場面が「よ」を使用する典型的な場面の一つであることがわかる。一方、聞き手が話し手に注意を向けている場合(場面1から3)と向けていない場合(場面4から6)の相違に注目すると、どちらの場合でも「よ」の使用率は高い

ものの、「付いて(い)るφ / 付いて(い)ます」や「落としたφ / 落としましたφ」のように「よ」のない形の使用率が前者より後者の方が低いことがわかる。4.1で言及した通り「よ」がないと独語的となり、当該の発話が聞き手に向けられたものであることを明確に示せない。よって、前者のような発話状況であれば「よ」がなくても不自然とはならないが、後者のような発話状況では不自然さが残るため、「よ」のない形の使用率が低いと考えられる。「付いて(い)るぞ / 付いて(い)ますけど」や「落としたぞ / 落としましたか」のように「よ」以外を選択することも可能であったが、それ程多いとは言えず、「よ」の使用率の高さが際立つ結果となった。

一方、KJLの場合、「よ」の使用率がJNSの場合と比較して全体的に低いことがわかる。聞き手が友達の場合、「よ」の使用率が場面1で52.8%、場面4で60.8%と半数以上が「よ」を使用しているものの、聞き手が目上あるいは親しくない者の場合、「よ」の使用率が15.1%～23.5%と途端に低くなっている。「付いて(い)ますけど」や「落ちましたが」のように「よ」以外の回答も見られるが、「付いて(い)ますφ」や「落としましたφ」のような「よ」のない形の使用率が高い。特に場面5と6のように、聞き手が話し手に注意を向けていない発話状況では「落としましたφ」のような「よ」のない形だと独語的となるため不自然さが残るが、いずれも67.9%(場面5上)、47.2%(場面6疎)と使用率が高いことがわかる。

5.2 承諾・是認の場面の「よ」の場合

次に、承諾・是認の場面での「よ」の使用実態である。今回は承諾の場面に限って調査した。場面7から9では、相手から翻訳を依頼されたときに、「いい」を使ってどのように答えるかを問うた。相手の属性はそれぞれ友達、先生、(国際交流イベントで声をかけられた)見知らぬ人とした。場面10から12では、相手からそれぞれ約束の変更、面談時間の変更、クリーニングの受け取り日の変更を依頼されたときに、「構わない」を使ってどのように答えるかを問うた。相手の属性はそれぞれ友達、先生、クリーニング店の店員とした。

<表3> JNSによる承諾の場面の「よ」

「よ」の有無	7親	8上	9疎	10親	11上	12疎
「よ」あり	78(94.0%)	64(100.0%)	73(97.3%)	74(89.2%)	56(73.7%)	50(70.4%)
「よ」なし	0(0.0%)	0(0.0%)	1(1.3%)	2(2.4%)	20(26.3%)	20(28.2%)
「よ」以外	5(6.0%)	0(0.0%)	1(1.3%)	7(8.4%)	0(0.0%)	1(1.4%)

回答例の一部を以下の通り提示する。

- (54) 〈7親・「よ」あり・JNS062〉 いいよー！見せて〜。
 (55) 〈7親・「よ」以外・JNS026〉 え、別にいいけど。
 (56) 〈8上・「よ」あり・JNS072〉 いいですよ。どれですか。
 (57) 〈9疎・「よ」あり・JNS026〉 いいですよ。少々おまちくださいね。
 (58) 〈10親・「よ」あり・JNS060〉 え、もうぜんぜんOK！構わんよ！むしろバイトがんばって！
 (59) 〈10親・「よ」以外・JNS072〉 構わないけどさ。
 (60) 〈11上・「よ」あり・JNS047〉 あ、はい、構いませんよ。
 (61) 〈11上・「よ」なし・JNS043〉 はい、構いませんφ。よろしくお願ひします。
 (62) 〈12疎・「よ」あり・JNS048〉 構いませんよ。金曜日に受け取りに行きます。
 (63) 〈12疎・「よ」なし・JNS015〉 はい、構いませんφ。

<表4> KJLによる承諾の場面の「よ」

「よ」の有無	7親	8上	9疎	10親	11上	12疎
「よ」あり	48(92.3%)	15(30.6%)	20(40.8%)	34(64.2%)	5(9.6%)	5(9.6%)
「よ」なし	2(3.8%)	34(69.4%)	28(57.1%)	16(30.2%)	40(76.9%)	36(69.2%)
「よ」以外	2(3.8%)	0(0.0%)	1(2.0%)	3(5.7%)	7(13.5%)	11(21.2%)

回答例の一部を以下の通り提示する。

- (64) 〈7親・「よ」あり・KJL021〉 いいよ。こんなもん、らくしょうらくしょう。
 (65) 〈7親・「よ」なし・KJL037〉 はい、いいφ。
 (66) 〈8上・「よ」あり・KJL001〉 いいですよ。まかせてください。
 (67) 〈8上・「よ」なし・KJL050〉 いいですφ。いますぐやくしますか。
 (68) 〈9疎・「よ」あり・KJL044〉 いいですよ、見せていただけますか？
 (69) 〈9疎・「よ」なし・KJL025〉 はい、いいですφ。どんな文ですか？
 (70) 〈10親・「よ」あり・KJL002〉 かまわないよ。きにしないで。
 (71) 〈10親・「よ」なし・KJL012〉 急に？大変だね。私がかまわないφ。
 (72) 〈11上・「よ」あり・KJL043〉 はい、私がかまいませんよ。
 (73) 〈11上・「よ」なし・KJL024〉 はい、私は構わないですφ。
 (74) 〈12疎・「よ」あり・KJL017〉 ああ、構わないですよ。
 (75) 〈12疎・「よ」なし・KJL031〉 かまわないですφ。できたられんらくして下さい。

JNSの場合、これら承諾の場面では「よ」の使用が必須的だからか「よ」の使用率が非常に高い。特に「いい」を指定の述語とした場面7から9の場合、場面7で「いいけど」のような「よ」以外の回答も若干数見られるが、殆どの回答者が「いいよ / いいですよ」のように「よ」を使用している。「構わない」を指定の述語とした場面10から12の場合も「よ」の使用率は高く、どの場面も70%以上である。特に聞き手が友達である場面10での「よ」の使用率は89.2%で、最も高い。ただし、聞き手が目上や親しくない者の場合、「構いませんφ」のように「よ」のない形での回答もそれぞれ26.3%(場面11上)、28.2%(場面12疎)見られた。先の4.2において、特に聞き手が心理的距離のある相手で、スピーチスタイルが敬体の場合、「構いませんφ / 構わないですφ」のように「よ」がなくても承諾が成立し得、「よ」の使用がむしろ聞き手に対するインポライトネスやFTAとなるリスクを含むため、回避されるという可能性について指摘したが、このような発話状況と「よ」の特性がJNSの回答結果にも反映されたと考えられる。

一方、KJLの場合、聞き手が友達である場面7と10では「よ」の使用率が高いものの、聞き手が目上や親しくない者である場面では「よ」の使用率が全体的に低く、「いいですφ」や「構わないですφ」のような「よ」のない形の使用率が高くなっている。特に、指定の述語が「いい」で、「よ」の使用が必須的である場面8と9での「よ」のない形の使用率が比較的高く、それぞれ69.4%(場面8上)、57.1%(場面9疎)であるのが注目される。先の4.2で述べた通り、「いい」や「構わない」のようにそのみでは承諾かどうか曖昧な述部の場合、「よ」によって承諾の意味を確立する必要がある。「構いませんφ(構わないですφ)」の場合は幾分か許容度が上がり不自然さは残らないものの、それ以外の場合は「よ」がないと承諾の意味が確立せず、不自然どころか文脈的に不適切となる。「よ」の使用が必須的な承諾の場面で「よ」のない形が使用される原因はいくつか考えられる。「よ」があつてはじめて承諾として成立するということが充分認識できていない、それに加え、「よ」の使用は場合によって聞き手へのインポライトネスやFTAの原因になり得るという認識があり、使用を回避する等である。この点についてはさらなる分析を要するが、JNSの回答結果と隔たりがあるのは確かである。

5.3 一方的・反抗的な場面の「よ」の場合

最後に、一方的・反抗的な場面での「よ」の使用実態である。今回は反抗的な場面に限って調査した。場面13から15では、相手からそれぞれ料理の腕前、留学先で講義を受講する能力、飼育の難しい熱帯魚の飼育力を疑われて否定的な意見を言われたときに、「できる」を

使ってどのように答えるかを問うた。相手の属性はそれぞれ友達、先生、ペットショップの店員とした。場面16から18では、相手からそれぞれ約束日時を覚えているか、留学するための努力が不足している現状を理解しているか、熱帯魚の飼育に関する注意事項を理解しているか疑われ、否定的な意見を言われたときに、「わかる」を使ってどのように答えるか問うた。相手の属性はそれぞれ友達、先生、ペットショップの店員とした。

<表5> JNSによる反抗的な場面の「よ」

「よ」の有無	13親	14上	15疎	16親	17上	18疎
「よ」あり	38(45.2%)	17(20.7%)	5(6.5%)	31(38.3%)	6(8.0%)	1(1.3%)
「よ」なし	9(10.7%)	50(61.0%)	59(76.6%)	29(35.8%)	68(90.7%)	78(98.7%)
「よ」以外	37(44.0%)	15(18.3%)	13(16.9%)	21(25.9%)	1(1.3%)	0(0.0%)

回答例の一部を以下の通り提示する。

- (76) <13親・「よ」あり・JNS060> で一きー一よー！できるってほんとに！！ (笑)
- (77) <13親・「よ」以外・JNS019> うるせー、できるわ。
- (78) <14上・「よ」あり・JNS054> もちろんちゃんとできますよ。
- (79) <14上・「よ」なし・JNS057> できますφ。そのために努力しますから。
- (80) <15疎・「よ」なし・JNS063> できますφ。水質に気をつけて飼育します。
- (81) <16親・「よ」あり・JNS034> さすがに今回はわかってるよ。
- (82) <16親・「よ」なし・JNS073> わかってるφ。
- (83) <16親・「よ」以外・JNS086> わかってるってば！
- (84) <17上・「よ」あり・JNS071> 自分のことくらい分かっていますよ。
- (85) <17上・「よ」なし・JNS060> わかっていますφ。難しくても厳しくても今行きたいんです。
- (86) <18疎・「よ」あり・JNS039> わかってますよ。

<表6> KJLによる反抗的な場面の「よ」

「よ」の有無	13親	14上	15疎	16親	17上	18疎
「よ」あり	27(51.9%)	8(16.3%)	6(11.5%)	18(34.0%)	2(3.8%)	1(1.9%)
「よ」なし	11(21.2%)	27(55.1%)	37(71.2%)	28(52.8%)	48(90.6%)	52(98.1%)
「よ」以外	14(26.9%)	14(28.6%)	9(17.3%)	7(13.2%)	3(5.7%)	0(0.0%)

回答例の一部を以下の通り提示する。

- (87) <13親・「よ」あり・KJL021> しつれいなやつだな。おれだってそれくらいできるよ。
 (88) <13親・「よ」なし・KJL008> できるっ!!!
 (89) <13親・「よ」以外・KJL039> あ! できるって! しんじろ!
 (90) <14上・「よ」あり・KJL038> そうかもしれないけど、きっとできますよ!
 (91) <14上・「よ」なし・KJL004> 私はできますっ。信じてくれませんか。
 (92) <15疎・「よ」あり・KJL015> できますよ、はじめてじゃないから。
 (93) <15疎・「よ」なし・KJL014> できますっ。しんぱいしないでください。
 (94) <16親・「よ」あり・KJL013> はい、はい。わかったよ。
 (95) <16親・「よ」なし・KJL032> ああ、わかっているっ。しんぱいするな。
 (96) <16親・「よ」以外・KJL005> わかったって(は)。今度はゼツタイ忘れないよ。
 (97) <17上・「よ」あり・KJL018> もちろん分かってますよ。
 (98) <17上・「よ」なし・KJL003> 分かってますっ。それで今頑張って勉強しています。
 (99) <18上・「よ」あり・KJL018> そんなことはよく分かってますよ。ちゃんと確認しますね。

「よ」以外でも聞き手への反抗的な態度を示すことができるためか、JNSとKJLともに「よ」の使用率はそれ程高くない。特に聞き手が友達である場面13と16では「できるわ」「できるって」や「わかったって(は)」のように「よ」以外に回答が分散したようである。聞き手が目上や親しくない者である場面でも両者は似たような傾向を見せており、「よ」の使用率が低く、「できますっ」のような「よ」のない形の使用率が比較的高い。今回の談話完成テストにおいて、これら反抗的な場面の場合、先の5.1情報の提示の場面や5.2承諾の場面ほどJNSとKJLの間で対照的な使用実態は浮び上らなかつたが、KJLの回答において、(92)や(99)のようにFTAとなり得るような回答例がいくつか観察されることも明らかとなった。

6. おわりに

本稿では、日本語の終助詞「よ」が使用され得る主な場面を、①「情報の提示・是正の場面」という聞き手に対して中立的な態度の場面、②「承諾・是認の場面」という聞き手に対して肯定的な態度の場面、③「一方的・反抗的な場面」という聞き手に対して否定的な態度の場面の三つに分類した。この分類に基づいて談話完成テストを作成し、日本語母語話者と韓国人

日本語学習者を対象に実施して、両者の「よ」の使用実態を調査した。その調査結果に基づき、日本語教育の場で「よ」を効果的に提示する上で意識化すべき要点について検討した。

まず、①「情報の提示・是正の場面」のうち、今回調査した「情報の提示の場面」では「よ」の使用が基本的に任意であるにもかかわらず、日本語母語話者の「よ」の使用率が非常に高かった。この場合の「よ」はインポライトネスやFTAとなるリスクも少ないと言える。よって、日本語教育の場では他の場面で使用される「よ」よりも優先的に提示することを提案する。尚、その際、聞き手が話し手に注意を向けているか否かといった発話状況により「よ」の必要性の程度が異なってくるため、その点も説明に加える必要がある。

次の②「承諾・是認の場面」のうち、今回調査した「承諾の場面」では「よ」の使用が必須的であるため、母語話者の「よ」の使用率は非常に高かったものの、学習者の「よ」の使用率が低く、「いい(です)よ」のような「よ」のない形の使用が目立った。同じ承諾の場面でも「いい(です)よ」や「構わないよ」のように「よ」が必須的で「よ」がないと文脈的に不適格となる場合や、「構いませんよ」のように「よ」がなくても不適格にならない場合、また「承知しましたよ」のように文脈によってはインポライトネスやFTAとなる場合もあるので、提示の際は以上の点についての説明を付加すべきである。

最後の③「一方的・反抗的な場面」のうち、今回調査した「反抗的な場面」の「よ」は、他の場面で使用される「よ」よりも提示の優先順位は低くなる。「よ」以外にも聞き手に対して反抗的な態度を表明する手段は多様にあり、この場面での母語話者の「よ」の使用率もそれ程高くないためである。しかし、この場面での「よ」の使用はインポライトネスやFTAとなる可能性が高い反面、聞き手への親しみの表明としても効果を発揮するため、それらの点を意識化した解説が必要である。

【参考文献】

- 一色舞子(2018)「韓国人日本語学習者による日本語の終助詞『よ』の使用」『韓国日本近代學會第37回國際學術大會要旨集』韓国日本近代學會、pp.71-78
- 大曾美恵子(1986)「誤用分析1『今日はいいい天気ですね。』-『はい、そうです。』」『日本語学』第5巻9号、明治書院、pp.91-94
- _____ (2005)「終助詞『よ』『ね』『よね』再考」『言語教育の新展開 牧野成一教授古稀記念論集』ひつじ書房、pp.3-15
- 加藤重広(2001)「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』35、富山大学、pp.31-48
- _____ (2004)『日本語語用論のしくみ』研究社

- 神尾昭雄(1990)『情報のなわばり理論 言語の機能的分析』大修館書店
- 金水敏・田窪行則(1998)「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」『堂下他編『音声による人間と機械の対話』オーム社、pp.257-271
- 高民定(2008)「接触場面における終助詞の言語管理-非母語話者の終助詞「ね」と「よ」の使用を中心に」『人文社会科学研究所プロジェクト報告書第198集『言語生成と言語管理の学際的研究』接触場面の言語管理研究』Vol.6、千葉大学大学院人文社会科学研究所、pp.97-112
- 高民定・崔英才(2015)「日本語学習者の終助詞「よ」「ね」「よね」の使用と習得問題-国内と海外における接触場面の会話データの分析から-」『언어학연구』한국언어연구학회、pp.283-305
- 崔英才(2016)「接触場面における終助詞「ね」「よ」「よね」の機能分析-発話連鎖の視点から-」『相互行為における接触場面の構築 接触場面の言語管理研究』vol.13、千葉大学大学院人文社会科学研究所 pp.19-36
- 西郷英樹(2012)「終助詞『ね』『よ』『よね』の発話連鎖効力に関する一考察 -談話完成タスク結果を基に-」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』26、関西外国語大学、pp.95-120
- 西郷英樹(2016)「終助詞『ね』『よ』『よね』の発話連鎖効力に関する一考察：大規模談話完成テスト調査報告」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』22、関西外国語大学留学生別科、pp.97-118
- 清水崇文(2009)『中間言語語用論概論 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- 白川博之(1992)「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』第77号、日本語教育学会、pp.36-48
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社
- 陳常好(1987)「終助詞-話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞-」『日本語学』6-10、明治書院、pp.93-109
- ナズキアン富美子(2005)「終助詞「よ」「ね」と日本語教育」『言語教育の新展開：牧野成一教授古稀記念論集(シリーズ言語学と言語教育;第4巻)』ひつじ書房、pp.167-180
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法<4>第8部・モダリティ』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

논문투고일 : 2019년 03월 21일
심사개시일 : 2019년 04월 16일
1차 수정일 : 2019년 05월 13일
2차 수정일 : 2019년 05월 16일
게재확정일 : 2019년 05월 17일

〈要旨〉

日本語母語話者と韓国人日本語学習者による終助詞「よ」の使用実態

- 談話完成テストの調査結果に基づいて -

一色舞子

本稿では、日本語教育の場において終助詞「よ」を効果的に提示することを目指し、次の通り考察した。まず、「よ」が使用され得る主な場面を、①「情報の提示・是正の場面」、②「承諾・是認の場面」、③「一方的・反抗的な場面」の三つに分類した。次に、この分類に基づく談話完成テストを実施し、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の「よ」の使用実態を調査した。その結果に基づき、「よ」を効果的に提示するための要点について検討し、次のような提案をした。まず、提示する際の優先順位は、場面①の「よ」、場面②の「よ」、場面③の「よ」である。場面①は母語話者の「よ」の使用率も高く、インボライトネスやFTA(フェイス侵害行為)となる可能性も少ないため、優先的に提示すべきである。場面③は「よ」以外の形式でも反抗的態度を示すことができるため、優先順位は低い。しかし、この場面での「よ」の使用はインボライトネスやFTAとなる可能性が高い反面、親しみの表明にもなるため、それらの点について解説が必要である。場面②は「よ」の使用が必須的な場面であっても、学習者の「よ」の使用率が低く、文脈的不適格となる「よ」のない形の使用率が高い。その一方で「よ」の使用によってインボライトネスやFTAの可能性が高まる場合もある。それらの点を意識した解説が必要である。

The actual status of the final particle “yo” usage by Japanese native speakers and Korean learners of Japanese

- Based on the Results of Discourse Completion Test -

Isshiki, Maiko

In order to present the final particle “yo” effectively in Japanese language education, I considered the following: the main scenes where “yo” can be used are classified into (1) “the scene of information presentation / correction”, (2) “the scene of acceptance / approval”, and (3) “the scene of one-sided / rebellious attitude”. Next, the discourse completion test (DCT) based on this classification was conducted to investigate the use of “yo” by Japanese native speakers and Korean learners of Japanese. Based on the results, I examined the points to be conscious of in presenting “yo” effectively in Japanese language education. First, when presenting “yo” in Japanese language education, the priorities are “yo” in (1) above, “yo” in (2) and “yo” in (3). “Yo” in (1) should be given preference because the usage rate of “yo” by native speakers is high and the risk of impoliteness and FTA (face threatening act) is small. In (3), we can show a rebellious attitude in not only “yo” but also other forms, so the priority is low. However, while the use of “yo” in this scene has the risk of impoliteness and FTA, it can also serve as an expression of familiarity, so a detailed explanation of these points is necessary. In (2), it was revealed that even if in the case that the use of “yo” is essential, the usage rate of “yo” by learners was low and the usage rate of the form without “yo”, which is contextually ineligible, was high. On the other hand, sometimes the use of “yo” in this scene may increase the risk of impoliteness and FTA. An explanation which takes these points into account is necessary.